

Title	7・8世紀の陰山における突厥と隋唐帝国：遊牧民と定住民の接触をめぐって
Author(s)	齊藤, 茂雄
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59371
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【18】

氏 名	さいとう しげお 齊 藤 茂 雄
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 2 5 3 2 6 号
学 位 授 与 年 月 日	平 成 2 4 年 3 月 2 2 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学 位 論 文 名	7・8世紀の陰山における突厥と隋唐帝国 — 遊牧民と定住民の接触をめぐって —
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 森 安 孝 夫 (副査) 教 授 荒 川 正 晴 教 授 桃 木 至 朗

論文内容の要旨

本論文は、北中国の北部に位置する陰山山脈周辺地域をめぐる突厥遊牧帝国と隋唐帝国の動向を探究し、この地域が遊牧民と農耕定住民の双方にとって、換言すれば中国史のみならず東部ユーラシア史全体にとってきわめて重要であったことを解明したものである。

従来はモンゴル高原の遊牧民と北中国の定住民を二項対立で捉えることが多かったが、最近の学界では、両者が連動して東部ユーラシア史を進展させたという見方が主流となりつつある。その際、遊牧民と農耕定住民が接触し混在する「農牧接境地帯」と呼ばれる地域が、歴史を展開させる勢力の揺籃の地となるとされている。本論文は、そうした農牧接境地帯の中でも北辺に当たり、遊牧民が定住民と最初に接触する陰山山脈周辺に注目し、7・8世紀の遊牧勢力である突厥（第一可汗国、552～630年／第二可汗国、682～744年）と定住勢力である隋唐帝国とがいかに関係・交流したかを論じている。

第1章では、漠北（ゴビ砂漠以北＝外モンゴル）に本拠のあった突厥第一可汗国の内乱によって、漠南（ゴビ砂漠以南＝内モンゴル）に逃れた王族・阿史那染干（後の啓民可汗）とその後継者について論じた。隋に亡命した啓民可汗は、隋に臣属してその後ろ盾を受けることとなった。そして、実力を回復した啓民可汗集団が漠北にいた正統な突厥可汗を破った結果、漠北より流入した多数の遊牧民を受け入れ、自らの近親者ならびに側近を中心に遊牧国家を再編成した。啓民可汗時代の突厥は、隋の全面的援助を受ける代わりに、隋による中華世界秩序の構築ないし維持を助けるという相互依存の関係にあった。啓民可汗以後、3人の息子（始畢可汗→処羅可汗→頡利可汗）が次々に可汗位を継承したが、この時代の突厥第一可汗国は本拠を一貫して漠南に置いていたのであり、北帰の意志は失っていた。それは、隋唐帝国との関係がそれ以前に比べて遙かに緊密になったため、隋末の混乱を経て北中国が群雄割拠の時代に入ると、今度は突厥が優位に立ち、登用したソグド人や漢人を使って北中国を自己の影響圏に包摂しようとさえ目論んだ。

第2章では、630年に唐によって滅ぼされた突厥第一可汗国の遺民集団の動向について、691年に死去した阿史那感徳の墓誌を中心に取り上げて論じた。彼は突厥第一可汗国最後の可汗である頡利可汗の曾孫に当たる人物であり、新たに建国された突厥第二可汗国に対抗する形で唐の傀儡可汗として即位させられただけでなく、既にそれ以前に阿史那氏の姻族集団である阿史徳氏と婚姻していた。これらの事実から、唐の羈縻支配下の突厥遺民が、雑多な遊牧民の集まりではなく、突厥第一可汗国の社会構造をそのまま残した集団として存在し続けたと推論した。

第3章においては、唐の羈縻支配政策について論じた。突厥羈縻州を統括していた単于都護府の所在地につき、初置単于府を内モンゴル自治フフホト市トクト県に、復置単于府を同市ホリソグドル県土城子遺跡に比定した。いずれも陰山以南で黄河以北の白道川と呼ばれる大平原の内部である。初置単于府は、唐による羈縻支配を脱して復興した突厥（第二可汗国）に陥落するが、白道川平原には708年に唐の三受降城が建設されて突厥の攻撃に対応することとなった。さらに単于都護府が720年に復置されるが、初置単于府のあった雲中古城と東受降城はほぼ同位置にあったため、重複を避けて単于都護府は東受降城より離れた土城子遺跡に置かれたと考えられる。東受降城と復置単于府のあった2地点は、陰山南麓の平原である白道川の中でも、南方の大同盆地

やオールドスヘ向かう交通の要衝であり、唐は北からの遊牧民の侵入を防ぐためこの2地点に防衛拠点を構えたものと思われる。

また、第3章第5節では、農牧接境地帯の中でも北辺に当たる白道川における定住民について概観し、陰山南麓には羈縻支配時代から定住民が流入していたこと、突厥滅亡以後に設置された軍事都市に人口の流入があったこと、彼らが北からの遊牧民の侵入に対して、陰山周辺に居住している遊牧民の軍事援助を利用して防衛していたことを論じた。

論文審査の結果の要旨

北中国の北部に位置する陰山山脈周辺地域が、古代から遊牧民と農耕定住民の接触するところであり、中国史のみならず東部ユーラシア史全体にとって重要であることについては、従来からも指摘があったが、それを、モンゴル高原の遊牧地域に中心をおく突厥と、華北の農耕定住地域に中心を置く隋唐帝国との動向を検討することで、具体的に解明した本論文の価値は大きい。

従来の説では、啓民可汗が隋から「啓民」という漢語の可汗号を与えられて冊立されている点に象徴されるように、当時の隋と突厥の力関係には明かな上下関係があり、両者は事実上の君臣関係にあったとし、漠南に本拠を置いた点より啓民可汗期の突厥は独立国家とすら認定しがたいとしていた。しかるに本論文では、亡命当初の啓民可汗の隋への臣属は文字通りのものであったが、実力を回復した後、啓民可汗が敢えて漠南に留まって建設した新たな突厥可汗国は隋に危険視されるほどに成長したのであり、その後の「臣属」はいわばパフォーマンス、すなわちその軍事力によって隋が中華世界の国際秩序を維持するのを助ける代わりに、以前と変わらぬ物心両面の支援を受け続けるためのものであったとして、従来の見方を一新した。

続いて評価すべきは、630年の突厥第一可汗国滅亡後、唐の羈縻支配を受けることになった突厥の遺民たちは大幅な人員の入れ替えや離散を経験することなく、以前の社会組織を残したまま取り込まれたのであり、いわば漠南の突厥第一可汗国がそのまま丸ごと唐帝国内部に包含されたものとみなした点である。この見方は、森安がチベット語の敦煌文書 P. t. 1283 を使って、突厥第二可汗国滅亡後、唐帝国内部の農牧接境地帯にブクチョル国、すなわち突厥国が存在したと論証して中国史研究者に意識改革を迫ったことと表裏一体の関係になり、今後、唐代史を再構築する際に大きな礎となるに違いない。

その他、唐が阿史那感徳を帰義可汗に冊立した意義を解明するなど、評価すべき点は随所に見られる。

よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。